養賢堂の蔵書と出版

養賢堂文庫とは

「文庫」とは、「書籍・文書を収納する倉。転じてまとまった蔵書単位を意味する」言葉です（井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店1999年による）。養賢堂では、安永8年（1779）に書庫を設けて以来、天保年間には約17000冊にも達する書物を所蔵していました。蔵書には「仙台府学図書」の蔵書印が押されています。明治維新後に蔵書は散逸してしまったものの、その半数は宮城書籍館の創立時に引き継がれ、青柳文庫とともに初期の宮城県図書館の蔵書の基礎となりました。その後疎開していた一部を除き、戦災により大半が焼失しました。現在宮城県図書館では、273部1603冊を「養賢堂文庫」として所蔵しており、伊達文庫にも養賢堂旧蔵の洋書が含まれています。養賢堂文庫の特色としては、和書の約7割が和算書であること、漢籍の善本が含まれていることが挙げられます。

養賢堂の出版

養賢堂では、生徒のための教科書類も出版されていました。これらの出版物を総称して「養賢堂板」といいます。出版されたのは主に四書五経などの儒学の教本で、養賢堂敷地内に設けられた「御蔵板摺所」で印刷されました。「養賢堂板」の書物は、後に城下の書肆も許可を得て刊行・販売し、仙台の出版・印刷に大きな影響を及ぼしました。

『蘭学階梯』2巻

大槻玄沢著　刊本
天明8年（1788）　江戸
群玉堂松本善兵衛・松本平助

仙台藩医であり、養賢堂学頭大槻盤渓の父であった大槻玄沢による蘭学入門書。日蘭交渉史から説き起こし、オランダ語の学習について初学者のために総合的に解説したもので、蘭学学習者に大きな影響を与えた書物でした。

『鈎股百五十好』（右）
写本
『鈎股百好』（左）
写本

養賢堂は正規の講座として数学を教授していた数少ない藩校のひとつでした。この2冊はいずれも直角三角形を題材とした問題集で、同じ内容のものが複数冊残されていることから貸出用や教科書として利用されたと考えられます。

『観文禽譜』11巻付録1巻

堀田正敦編
天保2年（1831）完成
写本　（県指定有形文化財）

仙台藩6代藩主宗村の8男で幕府の若年寄も務めた堀田正敦の編による記述を中心とした鳥類の詳細な解説書。図譜編である『禽譜』（伊達文庫）とともに江戸期における最大規模の鳥類学書として高く評価されています。

『秒度定刻範』

村田明哲著
安政5年（1858）序
仙台藩養賢堂　刊本

本館所蔵のものは『西洋時計便覧』と表紙に墨書きされています。仙台藩が建造した西洋式軍艦開成丸の航海上必要な西洋式時計の便覧として作成されたものと考えられ、携帯の便のためか約8センチ四方の小さな本となっています。

『仏露辞典』2巻

タシーチェフ編　1798年

養賢堂旧蔵の外国書の多くは蘭書（オランダ語の書物）ですが、物理・幾何・造船などに関するロシア語の書物も含まれています。これは養賢堂の「魯西亜学和解方」でロシア学が講じられていたためで、他の藩校には見られない養賢堂の特色でもありました。

『陽村先生文集』
40巻附陽村先生年譜1巻

権近撰　権蹈編
朝鮮宣祖（1567-1608）初葉
全羅道刊本（県指定有形文化財）

陽村は高麗末期・朝鮮王朝初期の政治家・儒学者であった権近の号。彼の死後子孫によって編集された文集が本書です。なお本館では、本書を含む朝鮮古刊本を46部262冊所蔵しており、すべて県の有形文化財に指定されています。

★宮城県図書館のルーツを訪ねて その2（青柳文庫）は、本誌No.23（06年11月発行予定）で特集します。

《叡智の杜》レポート　石巻市立鮎川小学校で子どもの本移動展示会が開催されました

本年6月12日から6月23日まで、石巻市立鮎川小学校で「子どもの本移動展示会」が開催されました。この「子どもの本移動展示会」は、県内の子どもたちに本に親しむきっかけをつくってもらい、また本を選ぶ際の参考としてもらうことを目的に、「次世代育成プロジェクト」のメニューのひとつとして県図書館が行っているものです。この移動展示会は当初県内公共図書館・公民館図書室を対象に行ってきましたが、平成16年度からは小学校も対象としています。平成18年度は小学校52校に対して、200冊を1セットとしてセット単位で子どもの本を貸出しています。鮎川小学校では2セットの貸出を受け、全校児童57人が子どもの本に親しみました。

また同小学校では低学年用・中高学年用の2種類の「読書通帳」が児童に配布されています。1ページ読むごとにポイント（単位は「ホエール」）が加算され、ホエールに応じた級が認定される仕組みになっており、子どもの読書意欲を高める取り組みもなされています。